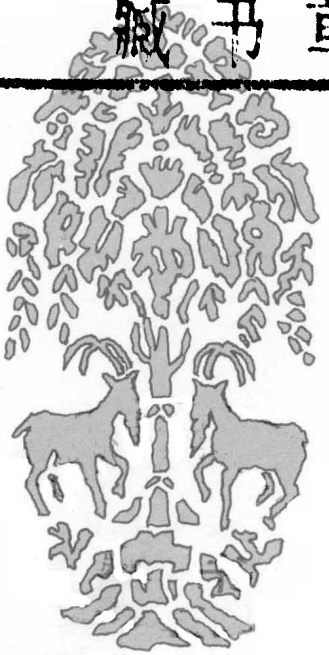
源氏物語十

阿部秋生
秋山虔
今井源衛
鈴木日出男
校注・訳

阿部秋

・訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



小学館

完訳 日本の古典 第二十三巻 源氏物語(十)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 阿部秋生 秋山 虔
今井源衛 鈴木日出男

発行者 相賀徹夫

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋二―三―一

振替口座 東京八―二〇〇番

電話 編集(〇三)二三〇―五一四一 業務(〇三)二三〇―五三三三 販売(〇三)二三〇―五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部あるいは全部を、無断で複写・複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

© A.Abe K.Akiyama G.Imai H.Suzuki 1988

(著者検印は省略いたしました)

ISBN4-09-556023-1

目次

凡例……三

原文　現代語訳

浮舟……一一……二五三

蜻蛉……八七……三〇六

手習……一四九……三四八

夢浮橋……二三三……三九八

校訂付記……二四三

巻末評論……四一一

付録

引歌一覧……四三五
官位相当表……四四二
各巻の系図……四四四
源氏物語引歌索引……四五一
源氏物語引用漢詩文索引……四八〇
源氏物語引用仏典索引……四八八

口絵目次

源氏物語図扇面／浮舟……1
源氏物語蜻蛉図白描色紙……2
源氏物語手習図白描色紙……3
源氏物語夢浮橋図色紙……4

〈装丁〉　中野　博之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

一、第十冊（浮舟～夢浮橋）の底本は、浮舟の巻には明融本を、蜻蛉・手習の巻には大島本を、夢浮橋の巻には池田本を用いた。各巻に使用した底本・校訂諸本は、「校訂付記」の巻名の下に略号によって列挙した。

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかいに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。

1　段落を分けて改行し、大きい段落には番号と見出しとを加えた。また句読を切り、濁点を加え、会話などを「　」でくくり、肩書を付した。

2　宛字は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。

大正し→大床子（だいしやうじ）　外尺→外戚（げさく）　五→碁（ご）　木丁→几帳　本上→本性（ほんしやう）　せふ正→摂政（せふしやう）　あか月→暁

思給る→思ひ(う)たまふ(へ)る　侍なり→はべなり・はべるなり　也→なり

猶・尚→なほ　中〳〵→なかなか

3　「〳〵」「ゝ」などの繰返し記号は用いず、文字を繰り返して表記した。また、「〳〵」「ゝ」を「々」に改めたものもある。

つゝ→つつ　やう〳〵→やうやう

日ゝ→日々　人〳〵→人々　御方〳〵→御方々

4　漢語の韻尾のm・n音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的にはn音（「ん」表記）に統一したが、例外もある。

三位（サンミ）　散位（サンニ）　汗衫　竜胆（または「りうたむ」）

5　底本に二通りの表記がある同語は、底本の形にしたがった。

かるし—かろし（軽し）　かぞふ—かずふ（数ふ）　うまる—むまる（生まる）　うめ—むめ（梅）

まな—まんな—まむな（真字）　ん—む（助動詞）　なん—なむ（助詞）　なめり—なむめり—なんめり　ついしよう—ついそう（追従）　こきでん—こうきでん（弘徽殿）　じようきやうでん—そきやうでん（承香殿）　おほいどの—おほとの（大殿）

一、底本を校訂した部分は、「校訂付記」に掲げ、校訂の拠りどころとした諸本の略号を記した。

一、各帖の本文冒頭にある巻名は、底本の題簽の文字を活字体になおして用いた。

一、脚注については、日本古典文学全集『源氏物語』の注をふまえてもいるが、なお次のような配慮のもとに執筆した。

1　簡潔・明快であることを旨とし、なおかつ脚注だけで十分本文が読解できるように心がけた。

2　本文の見開きごとに注番号を通して付け、その注釈は見開き内に収めるように心がけた。だが、スペースの関係で、時には前のページあるいは後のページの注を参照するよう、→を付してページと注番号を示した。

3　『源氏物語一～九』（第一冊～第九冊）を参照すべきことを示す場合は、次のようにした。

→帚木[1]四九ページ（本文を参照する場合）　→紅賀葉[2]五七ページ注三（脚注を参照する場合）

→須磨[3]〔一四〕（本文中の太字見出しの章段を参照する場合）

4　語釈は、スペースの許すかぎり、語義・語感・語法・文脈・物語の構成・当時の社会通念などにもふれながら、読解・鑑賞の資となるよう心がけた。

5　段落全体にわたる問題、とくに鑑賞・批評などには、◈を付して記した。

6　引歌がある部分の注は、当該引歌とその歌が収録されている作品および作者とをあげるにとどめ、引歌の現代語訳と解説とは、巻末付録「引歌一覧」に掲げた。

7　登場人物・官職・有職故実については、本文の読解・鑑賞に必要な範囲内にとどめたので、巻末付録の「系図」「官位相当表」をも併せて参照されたい。

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1　原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るようにつとめた。

2　そのために、必要に応じて、(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白（モノローグ）・心内語・引用における「　」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉の付加などの工夫をした。

3　和歌は、全文を引用したのち、その現代語訳を（　）内に示した。

4　見出しは、本文に付した見出しと同じものを現代語訳の該当箇所に付けた。
5　原文と現代語訳との照合の検索の便をはかり、それぞれ数ページおきの下段に、対応するページ数を示した。

一、巻末評論は、本巻所収の巻々に関連して問題となるテーマを一つとりあげて論じた。

一、巻末付録として、「引歌一覧」「官位相当表」「各巻の系図」「源氏物語引歌索引」「源氏物語引用漢詩文索引」「源氏物語引用仏典索引」を収めた。

一、本巻の執筆にあたっての分担は、次のとおりである。
1　本文は、阿部秋生が担当した。
2　脚注は、秋山虔と鈴木日出男が執筆した。
3　現代語訳は、秋山虔が執筆した。
4　巻末評論は、今井源衛が執筆した。
5　付録の「引歌一覧」は、鈴木日出男が執筆した。

一、その他
1　口絵の構成・選定・図版解説については田口栄一氏を煩わした。
2　口絵に掲載した『源氏物語図扇面』については浄土寺の、『源氏物語図色紙』については東京国立博物館・徳川黎明会の協力を得た。

源氏物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浮(うき)舟(ふね)

巻名　宇治川を渡る舟の中で、匂宮の歌「年経ともかはらむものか橘の小島のさきに契る心は」に応えた浮舟の「橘の小島の色はかはらじをこのうき舟そゆくへ知られぬ」の歌による。

梗概　匂宮は、二条院で会った浮舟のことが忘れられず、中の君を責めるが、中の君は沈黙を続けている。一方、薫は悠長にかまえて、宇治を訪れることも間遠であった。

年明けて正月、浮舟から中の君のもとに新年の挨拶が寄せられた。その文面から女の居所を知った匂宮は、家臣を通してそれが薫の隠し女であることを知る。異常な興味につき動かされてひそかに宇治を訪れた彼は、薫を装って浮舟の寝所に入り、強引に思いを遂げた。女が人違いと気づいたときには、もう取返しがつかない。心と犯したわけではない過失に浮舟はおののくが、身分を顧みず宇治に逗留する匂宮の、薫とは対照的な一途の情熱に、しだいに惹かれていくのであった。

二月、ようやく宇治を訪れた薫は、物思わしげな浮舟の様子に、女としての成長を感じ取って喜ぶとともに、いとしさも増し、京に迎える約束をする。秘密を抱く浮舟はただ煩悶するばかりである。

宮中の詩宴の夜、匂宮は、浮舟を思って古歌を口ずさむ薫の様子に焦燥の思いをつのらせ、雪をおかして再び宇治に赴いた。邸内の人目もはばかられる。匂宮は浮舟を対岸の隠れ家に連れ出し、夢のような耽溺の二日間を過した。

歓喜と後悔、苦悶。その浮舟のもとに、薫から近く京に迎える旨が告げられてきた。一方、それを知った匂宮からは、それに先立って彼女をわがもとに引き取ろうとの計画がひそかに知らされる。苦悩する浮舟の気持をよそに、事情を知らぬ母や乳母は京移りの準備に余念がない。

やがて匂宮との秘密が薫に察知される日がやってきた。宇治の邸で薫と匂宮双方の使者が鉢合せしてしまったのである。薫から不倫を詰る歌が届けられる。右近の語る東国の悲話を耳にするにつけても、浮舟は身につまされるが、途方にくれるしかない。追いつめられ、惑乱がつのり、ついには死を決意する。宇治の邸は、薫によって厳重な警戒体制が敷かれ、無理をおして訪れた匂宮も、浮舟に逢えぬまま帰京するほかなかった。

不吉な夢見を心配して、母中将の君から文が届けられた。死を間近に思う浮舟は、薫や匂宮、母や中の君を恋いながら、匂宮と母の二人にのみ、最後の文を書き認めた。

〈薫二十七歳の春。ただし当巻本文中には一歳年長のはずの匂宮の年齢との間に矛盾がある〉

うき舟

(一)匂宮、浮舟の素姓を問い、中の君を恨む

宮、なほかのほのかなりし夕を思し忘るる世なし。ことごとしきほどにはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかなと、いとあだなる御心は、口惜しくてやみにしこととねたう思さるるままに、女君をも、「かうはかなきことゆゑ、あながちにかかる筋のもの憎みしたまひけり。思はずに心憂し」と辱め恨みきこえたまふをりをりは、いと苦しうて、ありのままにや聞こえてましと思せど、「やむごとなきさまにはもてなしたまはざなれど、あさはかならぬ方に心とどめて人の隠しおきたまへる人を、もの言ひさがなく聞こえ出でたらんにも、さて聞きすぐしたまふべき御心ざまにもあらざめり。さぶらふ人の中にも、はかなうものをものたまひ触れんと思したちぬるかぎりは、あるまじき里まで尋ねさせたまふ御さまよからぬ御本性なるに、さばかり月日を経て思ししむめるあたりは、ましてか

◈前巻東屋と同じ年の冬から開始。

一　匂宮が二条院で浮舟を見出し、女房らに引き離された一件。→東屋9[三四]。薄暮の束の間の出遇い。

二　たいした身分とも思わなかったが。新参の女房ぐらいに思った。

三　匂宮の浮気な性分。

四　中の君に対しても。

五　自分が女房ふぜいの女とかかわるぐらい何でもないことなのに、中の君がむやみに嫉妬するとは意外だ、の気持。嫉妬して浮舟の素姓や所在を明かさぬのだと恨んだ。

六　以下、中の君の心中。

七　以下も、中の君の心中。薫が浮舟を格別重々しくはお扱いにならぬようだが。→東屋9[四三]。

八　薫。次行の「人」は浮舟をさす。

九　匂宮は。彼は浮舟の噂に無関心ではいられまいと中の君は思う。

一〇　以下、一時の慰みから若い女房に手出しをしがちな匂宮の見苦しい性分。→東屋9一七三ページ七行。

一一　女房の実家まで。

一二　匂宮が浮舟に迫ったのは八月。三、四か月後の今も忘れられない。

一三　女房に手出しする場合以上に。

ならず見苦しきこと取り出でたまひてむ。外より伝へ聞きたまはんはいかがはせん、いづ方ざまにもいとほしくこそはありとも、防ぐべき人の御心ありさまならねば、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞおぼゆべき。とてもかくても、わが怠りにてはもてそこなはじ」と思ひ返したまひつつ、いとほしながらえ聞こえ出でたまはず、ことざまにつきづきしくは、え言ひなしたまはねば、おしこめてもの怨じしたる世の常の人になりてぞおはしける。

〔三〕薫、悠長にかまえて、浮舟を放置する

かの人は、たとしへなくのどかに思しおきてて、待ち遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやりたまひながら、ところせき身のほどを、さるべきついでなくて、かやすく通ひたまふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、「いまいとよくもてなさんとす。山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべきことどもつくり出でて、のどやかに行きても見む。さて、しばしは人の知るまじき住み所して、やうやう、さるかたにかの心をものどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく、なのめにてこそよからめ。にはかに、何人ぞ、いつよりなど聞き咎め

一 薫との関係での不都合を思う。
二 匂宮が浮舟の噂を他の人から。
三 薫にも、浮舟にも。
四 夫の浮気の相手が妹とあっては、他人の場合よりも、外聞の悪い思いをさせられることになろう。
五 自分の不注意から、匂宮に真相を知られ不都合な事態にならぬようにしよう、と思い返した。
六 二行「いとほしく」とも照応。ここは恋に心を砕く匂宮への憐憫。
七 嘘をもっともらしくつけないので。高貴な女君の上品な素直さ。
八 黙りとおして、夫の浮気に嫉妬しがちな平凡な女を装う。
◆匂宮の異常なまでの好色癖と、それゆえの浮舟執心。巻頭のこの設定が、浮舟の物語を新たに導く。
九 薫の、悠長にかまえた態度。
一〇 宇治の浮舟が。
一一 薫は権大納言兼右大将に昇進して公務多端（→宿木[9]一一一ページ一二行）、また女二の宮も降嫁。
一二 「恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに」（伊勢物語七十一段）。
一三 地の文から薫の心中に転ずる。

られんももの騒がしく、はじめの心に違ふべし、また、宮の御方の聞き思さむことも、もとの所を際々しう率て離れ、昔を忘れ顔ならん、いと本意なし」など思ししづむるも、例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし。渡すべき所思しまうけて、忍びてぞ造らせたまひける。

（三）薫なお中の君に心寄せる　中の君の境遇

すこし暇なきやうにもなりたまひにたれど、宮の御方には、なほたゆみなく心寄せ仕うまつりたまふこと同じやうなり。見たてまつる人もあやしきまで思へれど、世の中をやうやう思し知り、人のありさまを見聞きたまふままに、これこそはまことに、昔を忘れぬ心長さのなごりさへ浅からぬためしなめれとあはれも少なからず。ねびまさりたまふままに、人柄もおぼえもさま異にものしたまへば、宮の御心のあまり頼もしげなき時々は、思はずなりける宿世かな、故姫君の思しおきてしままにもあらで、かくもの思はしかるべき方にしもかかりそめけんよと思すをりをり多くなん。されど、対面したまふことは難し。年月もあまり昔を隔てゆき、内々の御心を深う知らぬ人は、なほなほしきただ人こそ、さばかりのゆかり尋ねたる睦びをも忘れぬ

後文に、浮舟を京に迎え取る心算。
一四　浮舟を宇治訪問の際の慰めに。
一五　日数のかかりそうな法会などにかこつけて浮舟を訪う心づもり。
一六　自分のたまさかの訪問で浮舟の心を気長になれるよう仕向けて。
一七　目だたぬようにするのが得策であろう。↓東屋四二〇〇ページ。
一八　急に浮舟を迎えて。
一九　薫にとって浮舟は大君の形代。
二〇　中の君。彼女から、大君追慕の心を喪ったかと思われたくない。
二一　以下、語り手の薫への推測。
二二　浮舟を京に移すべくその邸を。↓注二。
二三　以下、中の君への薫の親近。
二四　それを拝する女房らも。
二五　中の君は。以下、心中叙述。
二六　亡き大君を忘れぬ薫の誠実さで、後々まで厚情を保ち続ける例。
二七　薫は新年を迎えると二十七歳。
二八　亡き大君が妹の中の君と薫の結婚を望んでいたこと。
二九　匂宮の嫉妬から薫を遠ざける。
三〇　昔の事情を知らぬ新参の女房の思惑。並の人なら以前の交際を忘れずに親交するのも似合いだが。

につきづきしけれ、[一]なかなかかう限りあるほどに、例に違ひたるありさまもつつましければ、宮の[二]絶えず思し疑ひたるもいよいよ苦しう、思し憚りたまひつつ、[三]おのづから疎きさまになりゆくを、[四]さりとても絶えず同じ心の変りたまはぬなりけり。宮も、あだなる御本性こそ見[五]まうきふしもまじれ、若君のいとうつくしうおよすげたまふままに、外[六]にはかかる人も出で来[七]まじきにやと、やむごとなきものに思して、うちとけなつかしき方には人にまさりてもてなしたまへば、[八]ありしよりはすこしもの思ひしづまりて過ぐしたまふ。

[四]宇治の便りで匂宮、浮舟の行方を知る

[一〇]正月の朔日過ぎたるころ渡りたまひて、[一一]若君の年まさりたまへるをもてあそびうつくしみたまふ、昼つ方、小さき童、[一二]緑の薄様なる包文のおほきやかなるに、小さき鬚籠を小松につけたる、また、すくすくしき立文[一四]とりそへて、奥[一五]なく走り参る、女君に奉れば、宮、「それはいづくよりぞ」とのたまふ。童「宇治より大輔[一六]のおとどにとて、[一七]もてわづらひはべりつるを、例の、御前[一八]にてぞ御覧ぜんとて取りはべりぬる」と言ふもいと[一九]あわたたしきけしきにて、童「この籠は、金をつくりて、色どりたる籠なりけり。

一　なまじ制約のある高い身分では、常識に外れた親交も気がひけるので。女房の感想から、おのずと中の君の心中に転換する文脈。
二　匂宮は以前から、中の君と薫の仲に疑惑を抱いていた。→宿木9八二ページ・東屋9一六八ページ。
三　中の君が薫に対して。
四　それでも薫は今までどおり。
五　中の君からすれば、厭わしく思われるふしがないではないが。
六　中の君腹以外には。
七　若君を格別だいじに。父匂宮とともに皇位継承の可能性もある。
八　中の君を、気のおけぬ親しい夫人としては。正室の六の君の親しみにくさと対比していう。
九　中の君は。匂宮と六の君の結婚当初の絶望的な思いに比べる。
一〇　新年。匂宮二十八歳。
一一　匂宮が二条院に。
一二　緑の薄い鳥の子紙で包んだ手紙。ここは、中の君への浮舟の文。
一三　鬚のように端を編み残した竹籠。後文によれば、「小松」も細工物。正月子の日の小松引きにちなみ、中の君の除厄延年を祝う。料

（現代語訳二五五ページ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com